

# R10 Congress 2013 Hyderabad 参加報告書

菊池翔<sup>1</sup>, 末房佳小里<sup>2</sup>, 倉田博之<sup>3</sup>

兵庫県立大学 SB<sup>1</sup>, 東京農工大学 SB<sup>2</sup>, 東京理科大学 SB<sup>3</sup>

## 1. 概要

R10 とはアジアパシフィック地域(57 Sections, 582 Student Branches, 6 Councils)で構成されており, 会員数は約 73,000 人で全 Region の中でも大規模である. その中から Student, WIE, GOLD の会員約 200 人が集まり国際交流を行った. 期間は 7 月 11 日から 7 月 14 日の 4 日間で, 場所はハイデラバードの中でも有名な Taj Krishna ホテルで開催された. 本稿では, インドや他の国々と日本の文化の違いなども含めて R10 Congress について報告する.

## 2. スケジュール

### 7/11 (Thu.)

8:00- Check-IN at TAJ KRISHNA  
11:50- Delegate Registrations  
13:20- Informal Welcome Session  
14:00- Short Field Trip  
20:30- Dinner and Networking

### 7/12 (Fri.)

7:00- Breakfast  
8:00- Congress Welcome Address  
9:30- KEYNOTE 1  
10:30- KEYNOTE 2  
10:30- HIGH TEA  
10:50- Breakout Sessions  
11:50- Workshops  
13:20- Lunch and Networking  
14:00- Interactive Sessions  
15:30- HIGH TEA  
16:00- Motivational Talk  
17:00- Best Practice Sharing Session  
19:30- Awards Ceremony & Gala Night  
20:30- Dinner & Networking

### 7/13 (Sat.)

7:00- Breakfast  
8:30- Hands-On Workshop  
10:30- HIGH TEA  
10:50- Breakout Sessions  
11:50- Workshops  
13:20- Lunch and Networking  
14:00- Interactive Sessions  
15:30- HIGH TEA  
16:00- Leadership Talk  
17:00- SB Exhibition  
19:30- Cultural Performance  
20:30- Dinner & Networking

### 7/14 (Sun.)

7:00- Breakfast  
8:30- Leadership Case Studies  
10:30- HIGH TEA  
10:50- Preparing for Global Trends 2030  
11:50- Closing Ceremony  
13:20- Lunch and Networking  
14:00- Local Sight Seeing Tour

### 3. 1 日目

まずインドに降り立って感じた事は、交通量の多さと騒音のけたたましさだった。車は本来 3 車線であるところを車が 5 台も走っていて、クラクションは鳴りやまない。さらに原付バイクに 5 人乗りをしていたり、バスに飛び乗ったりと、最初から日本の「常識」との違いを思い知らされた。会場の Taj Krishna ホテルに車で向かう途中に何回か接触事故にあいそうになったが運転手は何も気にしていない様子であった。



図 1 インドの交通事情

ホテルに着いたらすぐにチェックインと **Registration** を行い部屋に向かうと、そこには見知らぬ人とダブルベッドがあった。誰かと 2 人部屋になることは承知していたが、まさかダブルベッドだとは夢にも思わなかった。そしてインド人の彼はムンバイセクションからの参加で、インドの様々な地域の事を教えてくれてとても仲好くなる事が出来た。

午後からは地元ツアーがあったが 4 日目にあるツアーと同じものだという事を聞き、この日に参加する事をやめ、昼食を取りがてら日本人 4 人で周辺を観光する事にした。インドは車優先社会であり、歩行者優先の日本とは違い交差点を渡るのも一苦勞であった。まず歩行者用の信号がない為、車が

来ないタイミングを見計らい、更に車の間を縫うように渡らなければならない。しばらく歩いた後、近くの大きなショッピングモールに入ろうとしたが、入口には警察官がおり、金属探知機で検査をされた。どうやら 2 月にテロがあった事の影響で厳重警戒をしているらしかった。



図 2 Taj Krishna ホテルの内部

夕食ではインドのカレーが何種類も置かれ、バイキング形式になっていた。マサラカレーなど、日本でなじみのある名前のカレーもあったが、全く違う味であるのに驚いた。米はタイ米のような細長くてパサパサしていて、カレーと相性が良かったが、私の舌には辛く感じられた。インド人に聞いたところ、「これではスパイシーさが足りない」らしい。この日の夜、他の二人は大丈夫みたいだったが、私はお腹を壊してしまった。



図 3 夕食のカレー

(東京理科大学 倉田博之)

#### 4. 2日目

ここでは、特に印象に残ったいくつかのプログラムについて言及する。

#### IEEE Keynote 2 ～Educational Activities and IEEE HKN～

この Keynote は、普通のプレゼンテーションとは異なるスタイルで行なわれた。話者の Michael Lightner 氏は、まず知らないもの同士をテーブルに座らせた。私のテーブルにはインド、マレーシア、バングラデシュからの代表者がいた。そして、教育などに関する質問について短時間で考えさせ、それぞれのテーブルでの結論を答えさせた。特に印象に残った質問は、“How many of your technical courses are in English?” であり、その回答の選択肢は“-Less than 25%, -About 50%, -More than 75%”であった。私の大学ではすべての授業が日本語で行われているが、私以外の参加者は全員“More than 75%”という回答であった。会場全体のアンケートでも“More than 75%”という回答が大半であった。このように、周りのアジア諸国では大学の授業が英語で行われているということを初めて知ったため、とても驚いた。これには、大学の授業のような高等教育を自国の言語で表現できるか否かという背景があるそうだ。彼らの国では英語で授業するしか選択肢がないのかもしれないが、それが彼らの英語力の向上につながっていることも確かだろう。その他にも教育に関する様々な質問が与えられ、国同士の違いや一人ひとりの考え方の違いを知るととても良いきっかけとなった。



図4 ワークショップの様子

#### Student Geo Forums

ここでは、バングラデシュやマレーシア、デリなど8つの Student Branch が各々の Student Branch の活動について紹介した。私たちの Branch の活動は、下級生向けのワークショップや英語学習など自分たちの学内で収まる活動が中心であるのに対し、今回紹介してくれた Branch は、様々な Competition などに積極的に参加しており、見習うべき点が多々あった。今回の Congress では自分たちの Student Branch の活動についても堂々と紹介できるよう、より積極的に活動の幅を広げていきたい。



図5 Karachi セクションの紹介

#### Student Retention

ここでは、IEEE 会員の会員保持率や、どのように会員を増加させるかなどについて

のプレゼンテーションが行われた。それによると、新しく IEEE 会員になった人の約 80 %が 5 年以内に会員をやめてしまうそうだ。そのため、全体の会員を増やすには会員保持率を向上させることが重要となる。さらに、一度 IEEE 会員をやめた人が再度会員になる率はとても低いそうだ。新入生を中心に IEEE への勧誘活動をし、多くの新規学生会員を得たものの、その後数年以内に彼らが会員をやめてしまうという現状に悩まされている Student Branch が多いようであった。このような問題を解決するため、新入生よりもむしろ、キャリアを考え始めた卒業に近い学生を勧誘することが提案された。私たちの Student Branch も新入生を積極的に勧誘しているため、この考えには驚かされたが、確かに理にかなっている。また、勧誘活動をする際に、IEEE 会員になるとどのような特典があるのかなど正しい情報を公開することが重要だそうだ。

### Awards and Gala Night

この日の夜は全員盛装し、IEEE 関連の授賞式が行われた。今回は残念ながら日本人が何かを受賞することはなかったため、今回の Congress ではぜひ何かしらの賞をいただけるよう精進したい。



図 6 Gala Night にて

### 全体的な印象

今回、日本からの参加者である私たちは、Student Branch など自分たちの紹介のプレゼンテーションやポスター発表を行うことはなく、全体的に受け身で Congress に参加していたようにも思える。他の国からの Delegates の積極性を見習い、次回の Congress では様々な場でより能動的に活動したい。

(東京農工大学 末房佳小里)

### 5. 3 日目

Congress3 日目は、R10Director である福田敏男先生の Multi Scale Robotic System に関する講演から始まり、IEEE DAYの Photo Contest, IEEE XTREEM の Programming Contest の紹介、2 日目に続き各国の Student Branch の活動報告、IEEE EMBS, PES などの各組織の紹介などが行われた。今まで存在すら知らなかった IEEE の多彩な活動を知ることができ、特に IEEE XTREME のような Student Member のための Competition の存在は日本の学生にも是非広めていきたいと思う。

また各プログラムと並行して、会場の外では研究紹介のポスター発表や、EMBS などへの加入勧誘が行われていた。

特に印象に残ったプログラムについて以下に言及する。

### IEEE Keynote 4~Humanitarian Technologies and Activities~

本プログラムでは IEEE SIGHT(Special Interest Group on Humanitarian Technology)の概要・活動報告に関するプレゼンが行われた。IEEE SIGHT は

“Humanityのための技術の発展”に焦点を当て、途上国などに対する技術支援などのボランティア活動を行い、彼らの生活水準の向上や職を得る機会を増加させることを目的とした団体である。IEEEではHumanitarian Technologyを推奨し活動を広めているが、その道程は長く、より多くのエンジニアの理解と協力を必要としているといった現状の問題が取り上げられていた。



図7 Humanitarian Technology についてのプレゼンテーション

### Multi-Cultural Performance

本プログラムでは、R10Congressに参加した各国のDelegatesが民族衣装を身に着け、ダンスの披露や、名産品などを持ち寄ることで自国の文化紹介を行った。我々日本人は、折り紙やけん玉、駄菓子、漫画などを持参し、それらを実際に体験・試食してもらいながら日本文化を紹介した。中でも特に習字が大人気で、他国のDelegatesの名前を日本語で書くだけで非常に喜ばれ、行列ができるほどであった。会場内の様子や参加者の評判から、各国の親睦を深めるといった意味でも非常に有意義な時間となったと思われる。



図8 大人気だった習字パフォーマンス  
(兵庫県立大学 菊池翔)

## 6. 4 日目

### Preparing for Global Trends 2030

Congress 4 日目はPreparing for Global Trends 2030 が特に印象的であった。1970年に2000年はテクノロジーがどう進化しているのかという絵を見せられたが、その中で、予想していた事が実際に起こっていたり、逆にまだ進歩していなかったり、予想以上に進化していたりするものがあつた。例えば空飛ぶ車などはまだまだ実現されてはいないし、テレビや携帯電話は予想以上に薄くなっているなど、未来のテクノロジーを予想するのは難しい事であるとした上で今後今以上に発展させるには、エンジニアが未来のビジョンを持っているかが重要になる。代表的なのはスティーブジョブズであり、彼の発言から「商品は顧客のニーズに合わせてはならない。なぜなら彼らはそれを手に入れたらまた次の新しいものがほしくなるからだ」という文を引用し、テクノロジーを進化させるためには開発する側が独自のビジョンを常に持っていなければならないということを重点に講演されていて、とても感銘を受けた。

## Local Sight Seeing Tour

Congress 最後のイベントは Local Sight Seeing Tour であった。ホテルを出て、ハイデラバードの街並みを眺めながら 30 分ほどマイクロバスで走ったところにチョウマハラ宮殿があり、内部を見学した。1857 年に建設が完成され、アサフ・ジャーヒー王朝の頃に集められていたコレクションの一部(車、衣装など)を見学する事が出来た。1 時間半ほど見学した後、バスに乗り込みフセイン・サガール湖にそびえたつ仏像を見ながら帰路についた。



図 8 チョウマハラ宮殿での記念撮影

## 7. 英語について

最も危機感を抱いたのは英語である。私はワークショップのディスカッションにおいて、全くと言っていいほど発言できなかった。上記したように、他の参加国の大学では、授業が英語で行われているのは当然のことなのだ。だから日常的に英語を使っているのである。それに比べて日本は英語で授業を行うことは殆どなく、ましてや毎日英語を使う機会すらない。現状で大学の授業を英語で行えと言ったところで内容の質が低下してしまう事は目に見えている。さらに、高校の時に英語は文系のモノだと

勝手に決めつけられているので、理系学生の方が文系よりも英語が苦手な人の割合が高い。しかし実際には国際会議や論文提出など英語を使う機会は非常に多く、これからのエンジニアにおいては絶対に身に付けなければいけない基礎知識である。したがって、今私達に出来る事は、IEEE の活動の中に少しでも英語を使う機会を増やす事だと考えている。例えば、留学生と交流の場を設けたり、外国人の先生を招いて英語のプレゼンテーションのコンペティションをおこなったりなど、そのような活動をして少しでも理系学生の英語力向上に役立てていきたいと本 Congress を通して強く思った。

## 8. 総括

本 Congress に参加し、IEEE の様々な活動の深い理解を得た。また国の垣根を越えて活動をすることも可能なのだということを知った。GOLD の鈴木さんがインドと日本でスカイプを用いてワークショップをするという案を持ってきていただいたのでぜひ活用させて頂きたい。また本 Congress で築いた国を超えた SB 同士の繋がりを今後に活かしていきたいと強く感じた。

(東京理科大学 倉田博之)

## 9. 謝辞

本 Congress に参加するにあたり様々な情報を提供して頂いた大越先生、大野先生を始め参加助成金を出して頂いた Japan Council 及び Tokyo Section の方々にこの紙面を借りて深く感謝いたします。